

目次

はしがき……………松尾 聰……………一

研究篇

『源氏物語』須磨の巻の表現と方法……………木船重昭……………七

うたの挫折——明石の君試論……………藤井貞和……………二〇

竹河巻と橋姫物語試論——竹河の構造的意義と表現方法……………池田和臣……………二六

古典としての源氏物語——とはすがたり執筆の意味……………清水好子……………三二

寢覚物語における「帝闖入事件」を考える……………関根慶子……………三七

とりかへばや物語「吉野の宮」の再検討……………鈴木弘道……………三三

——特にその準備について——

「有明けの別れ」の女君——その人物造型をめぐって——……………大槻 修……………三〇
 『おやこの中』と二条太皇太后宮式部……………三角洋一……………三五

資料篇

「源氏之雑説抄物」(『師説自見集』所収)の翻刻……………伊井春樹……………三一

『源氏物語』の源氏物語の巻の巻頭式部……………木俣重雄……………三二

『源氏物語』の源氏物語の巻の巻頭式部……………木俣重雄……………三二

『源氏物語』の源氏物語の巻の巻頭式部……………木俣重雄……………三二

参考文献

『源氏物語』

目次

研究篇

世の中いとわづらはしく、はしたなき事のみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさる事もや、とおぼしなりぬ。(三九五^(注1))

須磨退居を決意したものの、光源氏はさまざまに思いみだれる。

憂きものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむことをおぼすには、いと捨てがたきこと多かるなかにも、姫君の明け暮れにそへては思ひ嘆き給へるさまの、心苦しうあはれなるを、行きめぐりてもまたあひ見むことを必ず、とおぼさむにてだに、なほ一二日の程、よそよそに明かし暮らす折々だに、おぼつかなきものにおぼえ、女君も心細うのみ思ひ給へるを、いく年その程、と限りある道にもあらず、逢ふを限りにへだたりゆかむも、定めなき世に。やがて別るべき門出にもや、といみじうおぼえ給へば、忍びてもるともにもや、とおぼし寄る折あれど、さる心細からむ海づらの、波風よりほかに立ちまじる人もなからむに、かくらうたき御さまにて、引き具し給へらむも、いとつきなく、わが心にもなかなか物思ひのつまなるべきを、などおぼし返すを、女君は、「いみじからむ道にも、おくれ聞えずだにあらば」とおもむけて、うらめしげにおぼいたり。(三九五^(注2))

悪大臣一統の圧迫に、すでに左大臣は致仕し、今またその女嬪、先帝の一世源氏、参議大将光源氏ともあろう大立者も、官爵剝奪され、窮地に陥っている。對抗勢力排撃策は奏功し、悪大臣一統の専制あらわに、朝野を震撼させる光源氏追放は、もはや必定。しかし、そうした権謀術数の経緯や政界情勢の詳細は省筆して、ただちに、紫上の処遇に悩む光源氏とおくれじと哀しむ紫上を語る、その叙述は、先蹤諸詠を巧みに利用しつつ形成されていく。それらを析出すれば、次のとおりである。^(注2)

☆(1)思ひ捨てつる……あはれなるを、